

民族舞踊文化



No.6

1993年 4 月23日

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

財団法人 黛民族舞踊文化財団

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F TEL03-3583-3633(代)
FAX03-3583-3670

Bernard CATHELIN
ベルナール・カトラン

1919年5月20日 ポール・カトラン
とマドレーヌ・テライユの息子
としてパリに生れる。
1939年 志願兵となり空軍のパイロ
ット候補生となる。
1945〜48年 パリの国立高等美術学
校に入り、モーリス・ブリアン
ション教室で学ぶ。
1957年からパリ、ニューヨーク（フ
ィンドレー画廊）他で定期的個
展、グループ展に参加する。
1962年、メキシコ、ペルー、ブラジ
ル旅行。
1966〜67年 メキシコ、グアテマラ、
ソヴィエト、日本、カンボジア、
セイロン、インド旅行。
1973年 世界一周旅行。スイスより
画集出版。
1976年 母マドレーヌ・カトラン・テラ
イユの思い出のため、ヴァランス
の美術館にリトグラフ50点寄贈。
1981年 ペニス旅行。
冬はパリのアトリエで、夏はレ
ルバチュールで生活し、仕事をする。
彼の作風は、神秘的な明暗による詩
的、象徴的表現を得意とする。日本
をはじめ旅行した諸国で取材した多
くの作品を発表している。



◀ベルナール・カトラン作「橙色のテーブルと赤いバラ」(撮影・しゃつせただお)

今年は A K A

黛民族舞踊文化財団

理事長 黛 節子

数ある色彩の中で“赤”は強烈な個性を持っている。他の色を押しつぶす強さがある。

我が国では祝いの色、祭の色として位置づけられてきたが、個人的にはとかく好む色として選びにくい色のような気がする。

然し、私はカトランの“A K A”に接したとき、ばらの姿をした“A K A”は衝撃的な勢いで私の胸に飛び込んできた。——この「モダニズム」——私の知らなかった“A K A”がそこにあった。

民族舞踊家の仕事は、半分は過去の伝統を探る作業である。しかし過去を探るだけではなく、現代の息吹が反映されたものにしていかなければならない。

この一枚の絵から触発される赤、紅、赫、真紅・・Etc、多様なイメージを沸き立たせてくれるこの絵を掲げ、自分の感性をより深く磨く手立てとしたい。

幸い、御本人の了解も頂き、ここに掲載させて頂くことが出来たことを幸せに思う。

三味線ロード'Sおどり

6月18、19日の2日間にわたり、黛アート・サロンに於いて、三味線をテーマにした“三味線ロード'sおどり”が開催された。

矢野輝雄先生の監修・構成と解説・司会により、三味線伝来の系譜を辿りながら、沖縄三味線、大和三味線、津軽三味線の比較演奏と、黛理事長の踊りと浄瑠璃を挟み、最後は三者即興の合奏でフィナーレを飾った。



上り口説ばやし

黛 節子

プログラムは最初の三味線伝来地といわれる沖縄から始まり、中濱靖一さんの演奏で「牡牛節」「谷茶前」「西武門節」。そして黛節子さんの踊りで「上り口説・口説ばやし」が上演された。

沖縄舞踊の中でも「上り口説」はしばしば取り上げられるが、「口説ばやし」は現在殆ど上演されることなく、これを知っている人も僅かだということで、今回は矢野先生の御指導で復元が試みられた。

琉球から鹿児島を目指す海路の様子を踊りにしたもののだが、これに合いの手の囃し唄を唄いながら踊るといふ、通常の「上り口説」とは一寸趣の違うものであった。



沖縄三味線

中濱靖一



蜘蛛糸梓弦から仙台浄瑠璃

常磐津演奏 常磐津東蔵
浄瑠璃 黛 節子

(特別賛助会員)

有田 平
森 武雄
中田 乙一
上田 彦二

(賛助会員)

赤坂 久
赤原 秀雄
秋山 隆志
秋山 綾江
浅野 さわ
浅野 恒史

阿久津順子
有馬 臣子
安土 博之
相沢 雄一
青木タイコ
秋元 昌子

足立 誠一
朴 一桂
朴 泉美
香道 栄作
江戸 英雄
遠藤 和良

遠藤 昌孝
遠藤 照子
榎本 重孝
古沢 進
藤川 寺一
芙二三枝子

藤原としえ
藤原 明人
藤井 玲子
藤本 佳子
藤田 幸子
深沢 幹一

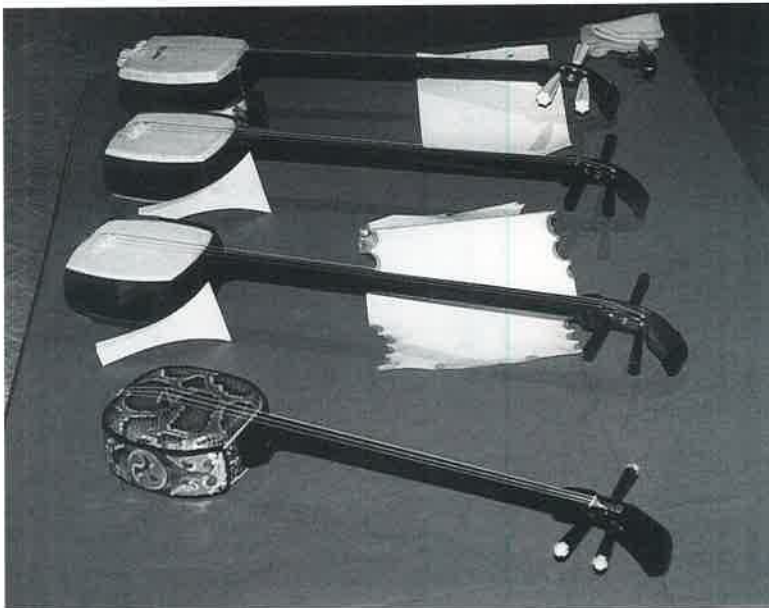
平成4年6月18日(木)
6月19日(金)

三味線まんだら



続く大和三味線では、常磐津東蔵さんの三味線で、黛節子さんにより「蜘蛛糸梓弦」から仙台浄瑠璃の部分が語られた。これは、名人といわれた節子さんの亡き父上、常磐津三蔵さんへの御供養の意味が込められていたという。節子さんはこの演奏のため、改めて常磐津の家元、小文字太夫さんの元に稽古に通われ、しかも民族舞踊家らしく、特に方言色の強い仙台浄瑠璃の部分が取り上げられた。

休憩の後、梅若清瑛さんによる長唄三味線と津軽三味線の解説等に続いて「じょんからづくし」が演奏された。「じょんから」も地域によって内容は様々で、それぞれの違いを、お話を交えながら弾き語ってもらった。弾き語りの後は、黛節子さんの踊りが入って「津軽



三味線いろいろ

—追悼—

日本文化財団の理事長で、当財団の理事もお引き受け頂いた山脇亀雄先生が、去る12月8日お亡くなりになりました。

山脇先生は朝日新聞社に御在籍の頃から、舞踊評論家としての御立場からも、黛節子の踊りを高く評価して下さり、常に温かいお気持ちで励まして下さいました。今、改めて先生の御厚情の尊さを身に染みて感じております。

ここに謹んで先生の御冥福をお祈りいたします。

黛 節子



津軽三味線

梅若清瑛

じょんから節（旧節）。そして最後は出演者全員による即興演奏「三味線まんだら」で華やかなフィナーレとなった。

三味線と一口にいても、南から北へかくも多様な違いのあることに、多くの方々は御存じないのではないだろうか。糸の違い、駒の違い、撥の違い、奏法の違いを具体的に、中濱靖一さん常磐津東蔵さん、梅若清瑛さん、黛節子さん、そして司会の矢野輝雄先生とそれぞれの第一人者の方々が説明し、演じて下さったこの会は、普段三味線に縁のない方達にも非常にわかり易く、且つ大変楽しかったということであった。

(A B C 順＝敬称略)

深水つきの	花柳 宗岳	長谷川房子	細野美智子	原 樹美	井上 志
深谷 幸市	原 文兵衛	蓮沼力太郎	細谷 誠	橋本 英子	入方 宏
福渡 誠	原山ゆう子	平田智佳子	堀内 実子	犬丸 直	稲田とし子
古在 由秀	原田 良子	平山 芳子	堀 泰明	石井みどり	岩瀬敬一郎
古口美江子	春山 房信	穂刈甲子男	辺見 昌子	石塚 保	井浦 芳信
花柳 衛吉	春山美香子	星野 紘	林 ちか	井上 正美	石田 一良

第4回 ライスロードの舞踊家招聘



内田文化庁長官(右から4人目)表敬訪問

1992年8月13日

中国舞踏家協会雲南分会代表団一行来日。
夕刻より黛アート・サロンに於いて歓迎会が開かれる。

1992年8月14日

黛理事長の案内で、代表団一行は交流取材と交歓会の為、静岡県の中川根町に向かう。
新幹線で東京を発ち、金谷で大井川線に乗り換え、山深い中川根町徳山に着く。

町制施行30周年記念行事の一環として、町を挙げての歓迎を受ける。

1992年8月15日

お茶の町、中川根の浅間神社の舞台で、代表団と地元保存会の交流レッスンが始まる。

保存会は鹿ん舞とかぼちゃおどり(盆踊り)を披露し、代表団はイ族の羅作舞を教える。

午後、一行は浅間神社の神事に参列する。

地元中学生の舞う四座舞等を観賞。その後鹿ん舞の道行に参加。行列は夕暮時浅間神社に到着。太鼓の音が響く中、徳山盆踊りが始まる。次々と花火が打ち上げられる中、交流舞踊が演じられた。

1992年8月16日

快晴の中、製茶工場と多目的ダムの見学を行う。更に山



徳山の鹿ん舞



老人舞の任 友三氏

(賛助会員)

石原 収吉
石川 隆一
飯島 芳江
伊藤より子
伊藤久美子
伊藤 陽子

伊藤智香子
井上 公明
今井 孝雄
城之内金洋
呉 慶子
呉 在恒

栗原 宏
栗原ひろ子
桑田美弥子
倉島 攝子
小早川勝登
杵屋佐登代

加藤 淳平
加戸 守行
桑原 雅子
木田 礼子
黒崎 守
菅 寿子

駒屋 和子
川畑 洋子
木下 邦二
木下 純寛
桑原 玲子
小泉 吉三

小松 厚子
北川 太一
桃沢佳乃子
神田 千代
亀岡 重則
神山美恵子

平成4年8月13日～8月23日



徳山駅前歓迎風景

上のログハウスや、展望台で景観を楽しんだ後帰路に就く。

1992年8月17日

黛アート・サロンに於いて日中交流舞踊開催。

1992年8月18日

代表団と黛理事長一行は、文化庁に内田文化庁長官を表敬訪問。その後、サントリー府中工場見学。近代化されたビール工場の規模に感嘆。

1992年8月19日

この日は一日ディズニーランドに遊ぶ。

1992年8月20日

山岳地方で生活する一行の為、海のある三浦海岸の福泉寺に向かう。

1992年8月21日

福泉寺の本堂で雲南少数民族舞踊公演を行う。

1992年8月22日

黛アート・サロンに於いて公開レッスンと送別会。

1992年8月23日

代表団一行、東方航空にて帰国。

雲南省舞踊家協会訪日代表団

団 長：	趙紹敏	男性	漢族
副団長：	任友三	男性	漢族
団 員：	朱子洸	男性	漢族
団 員：	秦竹芬	女性	漢族
団 員：	李美雲	女性	回族

歓迎風景



水たばこの踊



李 如春氏

かばちゃ踊りを習う秦さんと李さん

(A B C 順＝敬称略)

菅見 正次	春日部孝作	国井 菊生	松浦 静子	森永みの子	村川 正治
工藤 延雄	北村 宣道	松崎 国雄	松長 英子	村田けい子	森谷 利夫
金子 鮎子	小宝 芳弘	牧原 満男	水野 洋一	村田 信雄	前田 昌彦
川畑 禎子	北原 政子	松山 和子	三橋 達也	宗像富美子	増田あさ子
小林 研一	金子 星子	松原 剛	宮本 亨	森田 雅子	皆川 由年
兒玉 利和	北川 祐一	丸山 孝子	森 幸枝	三浦 文郷	中村 勝彦



何をしてるの？三高興

李 美雲

先生と別れ、美しい日本を離れ、新たに知り合った日本の友人たちとさよならをしてわたしは祖国に、我が家にそして仲間たちのもとに戻りました。でも私の心は先生や日本の友人たちのところにとどまっています。

日本での交流、学習のなかで私は日本の一切から深い印象を受けました。静岡県の中川根町徳山、三浦半島、そしてにぎやかな東京、そのすべてのところであたたかい歓迎と真心のこもったもてなしを受け、本当に感激いたしました。そのなかでも先生の印象はとりわけ深く、お互いに言葉は通じなくても、生活習慣や年齢は違っても、心は通じ合うものだと思います。私たちは共に手を携えて日中人民の世を継ぎ代を継ぐ友好に貢献し、国境や民族を越えた崇高な芸術のため一生を捧げようではありませんか。

先生から芸術に対する責任ある真摯な追求精神と、民族の伝統文化への深い愛情を学びました。その中でも特に、「一切のことは民族の伝統文化を発展させる神聖な事業の中にある」という教えは忘れられません。

黛先生、私は先生に再びお会いしたいです。

三浦の町で踊り歩く三人



黛 節子
高興（がوشん）——中国語で「嬉しい」という意味のこの言葉を私が初めて耳にしたのは、日中民族舞踊文化隔年交流が決定したその時に、来日した劉副主席の御挨拶の言葉の中からであった。その後交流を重ねるうち、私も自然とこの言葉が口をついて出るようになった。

昨年、招聘来日した女性舞踊家の秦さん、李さん達も性格明朗快活、素直でとても素敵な人達だった。そしてお互い踊りのこととなると、場所も忘れ夢中で身振り、手振りの交流を始めた。教えあった振りが納得出来、私が思わず「高興（がوشん）」と叫んだ途端、秦さんが自分を指差して「二高興（あーる・がوشん）」と応えた。続いて李さんが同じようなジェスチャーで「三高興（さん・がوشん）」と付け加えた。以後三人寄ると、何かにつけて自分を指差し「一高興（いー・がوشん）」「二高興（あーる・がوشん）」「三高興（さん・がوشん）」と笑い転げた。



三浦海岸で踊りのポーズ 黛理事長と李さん

黛先生 こんにちは

秦 竹芽

黛先生、私たちはこの度の10日間の訪日中にたくさんのすばらしい思い出をつくる事が出来ました。特に先生の優美な舞姿、朗らかな性格、やさしい態度、心からの友情、先生の美德は末長く私たちの心に深く刻まれました。先生は日本の友人の真情を一身に具現されました。

黛先生、先生に毎日つきそっていただき、そのおかげで私たちはとても楽しい雰囲気の中で芸術交流の任務を果たす事ができて、知らず知らずのうちに帰国の日がきてしまいました。滞日期間は短かったけれど私たちは先生から、日本の友人の優秀な品性と、とりわけ貴国の民族文化の保存と発展についての貴重な経験を学ぶ事ができました。それは私たちの今後の仕事の手本になることでしょう。

（賛助会員）

新田嗣治郎
西角井正大
西尾 学
内藤 寛子
長嶋 幸子
中前 勇

永井 亘
中西 好子
中尾 学
長崎 和男
成沢 節子
根岸 初子

長倉 和子
野口よし子
新田 陽子
岡田 茂
奥山 素章
奥田 勲

小沢 恂子
大島 昌代
大口 信夫
大野 晃
大西智恵子
大井 昭伍

大川 安子
大場 和子
小田部康伊
小田部綾子
折田 克子
岡本 春雄

大石 武治
岡村 一三
大島 雄子
大山 慶子
小野 成子
小原ゆかり

アジアの稲作芸能

諏訪 春雄

入試と学年末試験の合間を縫って、青森県の八戸^{はちのへ}地方の民俗芸能えんぶりの見学に行ってきた。

えんぶりは年のはじめに行われる田遊びの一種で、田の代を平らにならす農具がもとの意味である。一年の稲作の労働を象徴的によみこんだえんぶりと唄と楽器にあわせて三人あるいは五人の太夫が美しく大きな烏帽子をかぶり、大地を踏みしめて踊る。本来は小正月の行事であったが、明治以降、2月27日の豊作を祈る祭りとして定着した。2月17日の早朝、八戸の近郷、近在から集まってきた一組30人前後のえんぶり組が30組あまり、八戸市長者山^{しんろ}の新羅神社に集合したのち、御輿を先頭に市内を行列して練りあるく。

前日の午前に羽田を飛行機でたったわたしたちは、三沢の古牧温泉で一泊し、電車を乗り継いで、ちょうど行列の出発寸前に新羅神社の麓に到着して、行列についてまわった。

烏帽子をかぶった太夫を先頭に、えびす舞いの釣竿をかついだえびす、子供踊りの「えんこえんこ」の踊り手であるかわいらしい小学生や中学生たちなどがつづく。楽器は笛、太鼓、すり鉦など。降りしきるみぞれの中をはなやかな行列が延々とつづいた。かれらは、中心街まで練ってきて、そこで全員が「一斉摺り」を演じた。摺るとは躍ることで、総躍りをいう。まさに庶民のエネルギーがほとばしるような壮観さである。

えんぶりは日本の各地につたえられている田あそびのなかでも、もっとも芸能化がすすんでおり、あいだにはさまれた歌や躍りも洗練されている。しかし、太夫たちによる稲作の所作には古い儀礼のおもかげが見えて、この芸能にこめられた農民たちの豊作の祈りがうかがえる。

年のはじめに一年の稲作の作業過程をなぞらって、その年の豊作を神に祈願する祭りや芸能はアジアの稲作地帯にひろくいきわたっている。わたしは、韓国のムードンによ



えんぶり

る儀礼や、中国のチワン族や漢民族の稲作の儀礼と日本のそれとをくわしく比較したことがあるが、そこには顕著な類似性がある。大地に感謝し、大地の恵みをたたえる田あそびの所作は、日本の舞踊の歴史の中心を占めている。アジアの稲作舞踊との比較は今後にのこされた大切な研究課題である。

アジア文化研究プロジェクト発足

昨年、学習院大学東洋文化研究所の諏訪春雄先生等を中心に、アジア文化研究プロジェクトが発足しました。

アジア全域を対象とする文化研究の試みは、ライス・ロードの舞踊文化の調査研究をテーマの一端に掲げて活動する当財団の趣旨にも適うことから、黛理事長と当財団もこのプロジェクトに参加することが決まりましたので、設立の趣意と目的の概略を転載、御紹介致します。

『日本列島は有史以前から、周辺の三つの海、北方のオホーツク海、西方の日本海、南方の東シナ海を玄関口としてアジアの諸民族と交流し、その文化を取り入れて国家と文化を形成してきた。日本人が現時点における自己の立場を確認し、これからの国際社会における役割と責任を果たしていくためには、まず日本国家と文化の成立の過程を正しく認識しておくことが必須の要件となる。(中略)アジア文化研究プロジェクトの構想は、これまでの研究の在り方の欠落を補う、アジア文化専門の、自由な創造的な研究組織として設立されるものである。』———こうして発足したプロジェクトが、1993年1月8日、9日に催した第1回フォーラム「倭族と古代日本」に続き今年の10月23日、24日第2回公開講演会・フォーラム「渡来稲作文化にみる民俗と芸能」を学習院百周年記念会館大講堂等で開催することが予定されています。稲作文化の道、中国江南の民俗と芸能、朝鮮の伝統音楽等、魅力溢れる企画です。



えんぶり

(A B C 順＝敬称略)

七田 基弘
鹿海 信也
佐治 敬三
清水 とき
白井 永二
佐藤 浩子

白明 徳子
白山 明子
白井 信子
下山 元雄
佐々木 徹
関野 智子

白神 郁
杉本 孝子
砂村 妥女
山東 宮子
佐藤 秀市
島村 道子

鈴木 良
鈴木美代子
鈴木 聖子
斎藤 正剛
佐藤 隆夫
諏訪 功

佐藤 陽子
巢鴨 章
須藤 陽子
杉谷 頼秀
鈴木久美子
武田 章

武田 寿
武田 輝夫
武田 悦子
高橋 雅夫
田島 容子
田沢 敦夫

七草の宴

平成5年1月7日



黛当財団理事長の年頭の御挨拶



中華人民共和国駐日本国大使館章公使と



加戸守行日本芸術文化振興会理事長と



高村光太郎先生の掛軸

本年も1月7日、赤坂の黛アート・サロンに於いて『七草の宴』が開催されました。

例年の如く、当財団特有の赤米、白米のお粥で皆様楽しげに御歓談下さいました。

今年の赤米は、静岡県中川根の民俗舞踊「ひいやい踊り」保存会事務局長長濱寛二郎氏の御尽力により、静岡の登呂で作られた赤米を使用致しました。

もう一つ、この度の『七草の宴』でお知らせしたかったことは、高村光太郎先生の書を御披露出来たことです。

「精微妙」と書かれたこの書は、先生が岩手にいらした時、土地の方に書かれたものを、土地の方が勿体ないと言って、手拭に写しを作られた中の一枚だそうです。

昨年、私が叙勲の栄を賜った折り、師の栢沢宗匠からこの書を頂戴致しました。

高村先生は唐の黄三谷という書家を尊敬されていたりしたとも伺いました。

この立派な書をどのようにしたらよいのか、暫く考えあぐねておりましたが、漸く思い当たり、数ある草木染の中から選びに選んで表装して頂き、掛け物にして皆様方に御披露することが出来ました。永く永く財団の宝として大切に守っていきたいと思っております。

黛 節子

(賛助会員)

谷村美恵子 竹崎 宇吉
田中 良子 竹中 広夫
田中 栄子 竹本 越道
立石喜久子 多田 侑史
豊田 広子 坪倉 勝
徳山 素琴 田島その子

高井 浩
上野 和子
上野千代子
臼井 潔子
内海 陽子
和田 礼子

(A B C 順＝敬称略)

渡部 玲子 安田 敬一
吉田 正 山口太一郎
冷泉貴実子 山口 清
山折 哲雄 安本 義正
山田 三耀
矢野 輝雄

—お知らせ—
黛民族舞踊文化財団招聘
第9回 日中民族舞踊交流公演
ライス・ロードの芸術家と共に
—華・花・のプレゼント—
(またとない企画)

＊日中民族舞踊交流公演

平成5年5月10日(月)、11日(火) 於 草月ホール P.M.6:30開演
会費 5000円 Tel 3408-1126

出演者 中国 岩 宰 (傣族音楽家・シャンジョウ鼓奏者)
玉 光 (傣族舞踊家)
劉 宏 軍 (中国少数民族の笛の奏者)
林 あきら (打楽器奏者)
黛 節子 (日本民族舞踊家)

＊特別シンポジウム 「農耕儀礼と民族舞踊」

平成5年5月12日(水) 於 黛アートサロン P.M.3:00開演
会費 2000円 Tel 3583-3633

司 会 諏訪 春雄 (学習院大学教授)
通 訳 曾 紅 (学習院大学東洋文化研究所研究員)
出 演 岩 宰、玉 光、黛 節子

主 催 黛民族舞踊文化財団
後 援 文 化 庁
中華人民共和国駐日本国大使館

事務局 〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F Tel 03-3583-3633
財団法人 黛民族舞踊文化財団 Fax 03-3583-3670

黛民族舞踊文化財団のあらまし

当財団は昭和61年3月に民族舞踊文化に関する、公演、育成、研究等を通して広い視野と構想のもとに活動をしていくという目的をもって文部大臣より認可された財団法人であります。財団も、皆様の御理解と理事長の並々ならぬ民族舞踊文化に対する熱意により確実にその成果をはたしてきました。

伝統を重んじつつもそれを将来へ伝える為に舞踊が文化にいかなる務めをはたしているのが、我が国のみならず韓国や中国雲南の少数民族との永年にわたる密接なつながりをもつことにより、国際的な文化交流の実を上げてまいりました事は御理解いただけたと思いますが、今後とも尚一層の活動を行なう事が、当財団に課せられた責務であり、又なし得る事と考えて居ります。それらの事業をより有意義なものとするには、まず経済的な基盤の確立が必要と痛感せざるをえません。

当財団は右記の規定による“賛助会員規定”を設けまして、財団への皆様の心からの御支援と御理解を賜ることにより、一層の責をはたしていけると存じますので、“賛助会員”として会費による御支援をお願いした次第です。

(財)黛民族舞踊文化財団賛助会員規定

- 一、賛助会員とは、この法人の主旨目的に賛同して入会くださった個人・法人(団体)方々の名称です。
- 二、会費寄付の内容は下記の通りです(但し、年間会費として扱わせていただきます)
 - ア、個人の場合 個人会員 一万円以上
特別個人会員 十万円以上
 - イ、法人の場合
法人(団体)会員 十万円以上
特別法人(団体)会員 百万円以上
- 三、賛助会員の特典
 - ア、特別会員(個人・法人)
 - 1 年一回以上公演会の切符御一名様招待
 - 2 「財団の宴」など種々の行事に御招待
 - イ、会員(個人・法人)
 - 1 年一回以上公演会の切符御一名様招待

なお、御入会くださいます方は、賛助会員会費寄付申込書に御記入の上、御返送いただきたく存じます。(賛助会員会費寄付申込書は、当財団宛て、御請求くださいませ。)領収書は、銀行にお振り込み下さいました後、お送り申し上げます。



糸つむぎ歌（苗族）

秦 竹芬



松島音頭

黛 節子



羅作舞

朱 子洸、李 如春、李 美雲、秦 竹芬

民族舞踊文化 No.6

1993年4月23日発行 発行人 黛 節子 編集 大野 晃

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F

Tel03-3583-3633(代)
Fax03-3583-3670

財団法人 黛民族舞踊文化財団

特別頒価¥1,500

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

MAYUZUMI BLD. 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATO-KU, TOKYO